

## 非斉次反応項を持つ準線形放物型方程式の解の一意性

鈴木 龍一\*, 岡田 篤子\*

## Uniqueness of solutions of a quasilinear parabolic equation with an inhomogeneous reaction

Ryuichi Suzuki\*, Atsuko Okada\*

**Abstract:** We consider non-negative solutions of the Cauchy problem for a quasilinear parabolic equation with an inhomogeneous reaction:  $u_t = \Delta u^m + \langle x \rangle^\theta u^p$  in  $\mathbf{R}^N \times (0, T)$ . We show some comparison theorem for the Cauchy problem under restrictions on the growth rate of solutions as  $|x| \rightarrow \infty$ .

**Key words:** the uniqueness of solutions, quasilinear parabolic equation, inhomogeneous reaction

## 1. はじめに

本論文では、次のような空間変数に依存する反応項 (非斉次反応項) を持つ準線形放物型方程式の Cauchy 問題について考える。

$$u_t = \Delta u^m + \langle x \rangle^\theta u^p \quad \text{in } \mathbf{R}^N \times (0, T), \quad (1.1)$$

$$u(x, 0) = u_0(x) \quad \text{in } \mathbf{R}^N. \quad (1.2)$$

ただし、 $u_t = \partial u / \partial t$ ,  $\Delta$  は  $N$  次元ラプラシアン,  $p > m \geq 1$ ,  $\theta \geq 0$ ,  $\langle x \rangle = \sqrt{|x|^2 + 1}$ ,  $u_0(x)$  は  $\mathbf{R}^N$  で定義された非負の連続関数である。我々は、Cauchy 問題 (1.1) (1.2) の非負の (弱) 解のみ考える。(弱) 解は、次のように定義される。

**定義 1.1.** 次の (i) (ii) の条件が成り立つ時,  $\mathbf{R}^N \times [0, T)$  で定義された関数  $u(x, t)$  は  $\mathbf{R}^N \times [0, T)$  における方程式 (1.1) の (弱) 解であるという。

(i)  $\mathbf{R}^N \times [0, T)$  において  $u(x, t) \geq 0$  でありかつ  $u(x, t) \in C(\mathbf{R}^N \times [0, \tau])$  が各  $\tau \in (0, T)$  に対して成り立つ。

(ii) 滑らかな境界  $\partial\Omega$  を持つ任意の有界領域  $\Omega \subset \mathbf{R}^N$ , 各  $\tau \in (0, T)$ , 境界  $\partial\Omega$  で零になる任意の非負の関数  $\varphi(x, t) \in C^{2,1}(\bar{\Omega} \times [0, T))$  に対し,

$$\begin{aligned} & \int_{\Omega} u(x, \tau) \varphi(x, \tau) dx - \int_{\Omega} u(x, 0) \varphi(x, 0) dx \\ &= \int_0^\tau \int_{\Omega} \{u \partial_t \varphi + u^m \Delta \varphi + \langle x \rangle^\theta u^p \varphi\} dx dt \\ & \quad - \int_0^\tau \int_{\partial\Omega} u^m \partial_\nu \varphi dS dt \end{aligned} \quad (1.3)$$

が成り立つ。ただし、 $\nu$  は境界での外向き単位法線ベクトルである。

優解 [または劣解] も同様に定義される。ただし、優解 [または劣解] の場合は、(1.3) の等号 = を不等号  $\geq$  [または  $\leq$ ] に置き換える。

我々の目的は、準線形放物型方程式 (1.1) の解の一意性を示すことである。それは次の比較定理から直ぐに導かれる。

**定理 1.2** (比較定理).  $u$  を  $\mathbf{R}^N \times (0, T)$  における (1.1) の優解とし、 $v$  を  $\mathbf{R}^N \times (0, T)$  における (1.1) の劣解とする。次の不等式が成り立つと仮定する: ある数  $M > 0$  が存在して、

$$\| \langle \cdot \rangle^{\theta/(p-1)} u(\cdot, t) \|_\infty + \| \langle \cdot \rangle^{\theta/(p-1)} v(\cdot, t) \|_\infty \leq M \quad \text{for } t \in [0, T). \quad (1.4)$$

ただし、 $\|h\|_\infty = \sup_{x \in \mathbf{R}^N} |h(x)|$  for  $h \in L^\infty(\mathbf{R}^N)$  である。この時、 $v(x, 0) \leq u(x, 0)$  in  $\mathbf{R}^N$  ならば、全領域  $\mathbf{R}^N \times [0, T)$  において  $v \leq u$  が成り立つ。

この定理は次の命題からの直接の帰結である。

**命題 1.3.**  $u$  を  $\mathbf{R}^N \times (0, T)$  における (1.1) の優解とし、 $v$  を  $\mathbf{R}^N \times (0, T)$  における (1.1) の劣解とする。この時、ある数  $M > 0$  が存在して (1.4) が成り立つならば、各  $t \in (0, T)$  に対し次の不等式が成り立つ。

$$\begin{aligned} & \int_{\mathbf{R}^N} [v(x, t) - u(x, t)]_+ e^{-\langle x \rangle} dx \\ & \leq e^{3K_1 t} \int_{\mathbf{R}^N} [v(x, 0) - u(x, 0)]_+ e^{-\langle x \rangle} dx \end{aligned} \quad (1.5)$$

ただし、 $[a]_+ = \max\{a, 0\}$  であり、

\* 国士館大学理工学部

$$K_1 = \sup \left\{ \frac{\xi_1^m - \eta_1^m}{\xi_1 - \eta_1} + \frac{\xi_2^p - \eta_2^p}{\xi_2 - \eta_2} \mid 0 \leq \xi_i, \eta_i \leq M, \right. \\ \left. \xi_i \neq \eta_i (i = 1, 2) \right\} + 1 < \infty \quad (1.6)$$

である。

従って、解の一意性を示すためには、この命題を示せば十分であり、その証明は次のセクションで行われる。

## 2. 命題1.3の証明

このセクションでは、命題1.3を示す。証明の方法は Bertsch-Kersner-Peletier [2] の方法と同様である。

**命題1.3の証明.**  $u$  (または  $v$ ) を  $\mathbb{R}^N \times (0, T)$  における (1.1) の優解 (または劣解) とし、ある数  $M > 0$  に対して (1.4) が成り立つと仮定する。この時、 $\theta \geq 0$  より、

$$\|u(\cdot, t)\|_\infty + \|v(\cdot, t)\|_\infty \leq \|(\cdot)^{\theta/(p-1)} u(\cdot, t)\|_\infty \\ + \|(\cdot)^{\theta/(p-1)} v(\cdot, t)\|_\infty \leq M \quad \text{for } t \in [0, T) \quad (2.1)$$

である。更に、 $B_R = \{x \in \mathbb{R}^N \mid |x| < R\}$  と置くと、任意の非負関数  $\varphi \in C^{2,1}(\bar{B}_R \times [0, T))$  (ただし、境界  $\partial B_R$  で零になる) に対して、

$$\int_{B_R} (v(x, \tau) - u(x, \tau)) \varphi(x, \tau) dx \\ - \iint_{Q_\tau} (v - u)(\varphi_t + \phi \Delta \varphi) dx dt \\ \leq \int_{B_R} (v(x, 0) - u(x, 0)) \varphi(x, 0) dx \\ + \iint_{Q_\tau} (v - u) g \varphi dx dt \\ - \int_0^\tau \int_{\partial B_R} (v^m - u^m) \partial_\nu \varphi dS dt \quad (2.2)$$

が成り立つ。ただし、 $Q_\tau = B_R \times (0, \tau)$  ( $\tau < T$ )、 $\nu$  は境界の外向き単位法線ベクトル、

$$\phi(x, t) = \frac{v^m - u^m}{v - u} = m \int_0^1 (\xi v + (1 - \xi) u)^{m-1} d\xi, \\ g(x, t) = \frac{h^p - w^p}{h - w} = p \int_0^1 (\xi h + (1 - \xi) w)^{p-1} d\xi,$$

$h = \langle x \rangle^{\theta(p-1)} v$ ,  $w = \langle x \rangle^{\theta(p-1)} u$  である。ここで、(1.4) と (2.1) より、次の事に注意する。

$$0 \leq \phi + g + 1 \leq K_1 \quad \text{in } Q_\tau = B_R \times (0, \tau). \quad (2.3)$$

ただし、 $K_1$  は (1.6) で定義されたものである。

我々は、滑らかな正の関数列  $\{\phi_n\} \subset C^\infty(\mathbb{R}^N \times (-\infty, \infty))$  で次の事が成り立つようなものを選ぶ (see [1]):

$$\frac{1}{n} \leq \phi_n \leq \|\phi\|_{L^\infty(Q_\tau)} + \frac{1}{n} \quad \text{in } Q_\tau, \quad (2.4)$$

$$\frac{\phi_n - \phi}{\sqrt{\phi_n}} \rightarrow 0 \quad \text{in } L^2(Q_\tau) \quad \text{as } n \rightarrow \infty. \quad (2.5)$$

更に、 $\chi \in C_0^\infty(\mathbb{R}^N)$  を  $0 \leq \chi \leq 1$  を満たすようにとる。 $R_1 > 0$  を  $\text{supp } \chi \subset B_{R_1}$  が成り立つように大きくとり、 $R > 2R_1$  とする。そして、 $\psi_{n,R} \in C^\infty(\bar{B}_R \times [0, \tau])$  ( $n \geq 1$ ) を次の方程式の解とする。

$$\begin{cases} \psi_t + \phi_n \Delta \psi = 2K_1 \psi & \text{in } B_R \times [0, \tau), \\ \psi = 0 & \text{on } \partial B_R \times [0, \tau), \\ \psi(x, \tau) = \chi e^{-\langle x \rangle} & \text{in } B_R. \end{cases} \quad (2.6)$$

この時、次の補題が必要である。□

**補題2.1.**  $n \geq 1$ ,  $R > \max\{2R_1, 2\}$  である時、次が成り立つ。

- (i)  $0 \leq \psi_{n,R} \leq e^{-\langle x \rangle}$  in  $\bar{Q}_\tau$ ;
- (ii)  $\iint_{Q_\tau} \phi_n (\Delta \psi_{n,R})^2 dx dt < C$ ;
- (iii)  $\sup_{0 \leq t \leq \tau} \int_{B_R} |\nabla \psi_{n,R}|^2(t) dx < C$ ;
- (iv)  $0 \leq -\int_{|x|=R} \partial_\nu \psi_{n,R} dS \leq CR^{N-2} e^{-\langle R/2 \rangle}$  on  $\partial B_R \times [0, \tau]$ .

ただし、 $\langle R \rangle = \sqrt{R^2 + 1}$  ( $R > 0$ ) で、 $C > 0$  は  $\chi$  にのみ依存する定数である ( $n, R$  には依存しない)。

**証明.** まず、(i) と (iv) を示す。 $\zeta(x, t) = \psi_{n,R}(x, \tau - t)$  と変数変換する。その時、 $\zeta$  は次の問題の解である。

$$\begin{cases} \zeta_t - \hat{\phi}_n \Delta \zeta = -2K_1 \zeta & \text{in } B_R \times (0, \tau], \\ \zeta = 0 & \text{on } \partial B_R \times (0, \tau], \\ \zeta(x, 0) = \chi e^{-\langle x \rangle} & \text{in } B_R. \end{cases} \quad (2.7)$$

ただし、 $\hat{\phi}_n(x, t) = \phi_n(x, \tau - t)$  である。 $k(x) = e^{-\langle x \rangle}$  と置き  $k$  と  $\zeta$  の大きさを  $\bar{B}_R \times [0, \tau]$  で比較する。まず、(2.3) と (2.4) より、次の事に注意する。

$$\hat{\phi}_n \leq \|\phi\|_{L^\infty(Q_\tau)} + \frac{1}{n} \leq K_1 \quad \text{in } Q_\tau.$$

よって、

$$\Delta k(x) \leq 2e^{-\langle x \rangle} = 2k(x) \quad (2.8)$$

であるので、

$$-\hat{\phi}_n \Delta k \geq -2K_1 k \quad \text{in } B_R$$

が成り立つ。故に、 $k$  は  $B_R \times [0, \tau]$  で (2.7) の方程式の優解であることがわかる。不等式  $\zeta \leq k$  が、領域  $B_R \times (0, T)$  の放物型境界で成り立つ事に注意すると、線形放物型方程式に対する比較定理より、 $\zeta \leq k$  in  $B_R \times (0, T)$  が成り立つことがわかる。 $\zeta \geq 0$  in  $Q_\tau$  も示すのは難しくない。よって、(i) を得る。

次に、(iv) を示す。我々は、次の問題の解  $\hat{k}$  を利用する。

$$\begin{cases} \Delta \hat{k} = 2\hat{k} & \text{in } B_R \setminus \bar{B}_{R_1}, \\ \hat{k} = e^{-\langle x \rangle} & \text{on } |x| = R_1, \\ \hat{k} = 0 & \text{on } |x| = R. \end{cases} \quad (2.9)$$

その時、線形楕円型方程式に対する比較定理より  $0 \leq \hat{k} \leq$

$k=e^{-(x)}$  in  $B_R \setminus \bar{B}_{R_1}$  である。なぜならば、 $\hat{k}=k=e^{-(x)}$  on  $|x|=R_1$ ,  $\hat{k}=0 \leq k$  on  $|x|=R$  であり、更に (2.8) が成り立つからである。さらに、不等式  $\hat{k} \geq 0$  と不等式  $0 \leq \phi_n \leq K_1$  より、 $-\phi_n \Delta \hat{k} \geq -2K_1 \hat{k}$  が成り立つ。よって、 $\zeta(x, 0) = 0 \leq \hat{k}(x)$  in  $\bar{B}_R \setminus B_{R_1}$  と  $\zeta(x, t) = \psi_{n,R}(x, \tau - t) \leq \hat{k}(x)$  on  $\partial(B_R \setminus \bar{B}_{R_1}) \times [0, \tau]$  であるので、線形放物型方程式に対する比較定理より、 $\psi_{n,R}(x, \tau - t) = \zeta(x, t) \leq \hat{k}(x)$  in  $\bar{B}_R \setminus B_{R_1} \times [0, \tau]$  となる。故に、

$$0 \leq -\partial_\nu \psi_{n,R}(x, t) \leq -\partial_\nu \hat{k}(x) \quad \text{on } |x| = R \text{ and } t \in [0, \tau] \quad (2.10)$$

が成り立つ。

一方、 $\xi(x)$  を  $\mathbf{R}^N$  で非負の  $C^\infty$ -関数で、次の条件を満たすものとする： $\xi(x) = 0$  in  $|x| \leq 1$  であり  $\xi(x) = 1$  in  $|x| \geq 2$ 。  $R > \max\{2R_1, 2\}$  に対して  $\xi_R(x) = \xi(2x/R)$  と置く。この時、

$$\xi_R(x) = 0 \quad \text{in } |x| < \frac{R}{2}, \quad \xi_R(x) = 1 \quad \text{in } |x| > R$$

であり

$$\begin{aligned} |\nabla \zeta_R(x)| &\leq \frac{2}{R} |\nabla \xi(2x/R)| \leq \frac{C}{R}, \\ |\Delta \xi_R(x)| &\leq \frac{4}{R^2} |\Delta \xi(2x/R)| \leq \frac{C}{R^2} \text{ in } \mathbf{R}^N \end{aligned} \quad (2.11)$$

が成り立つ。(2.9) の方程式の両辺に  $\xi_R$  を掛け、次に  $B_R \setminus \bar{B}_{R_2}$  で積分し、部分積分することにより、

$$\begin{aligned} \int_{|x|=R} \partial_\nu \hat{k} dS + \int_{R/2 \leq |x| \leq R} \hat{k} \Delta \xi_R dx \\ - \int_{|x|=R} \hat{k} \partial_\nu \xi_R dS = \int_{R/2 \leq |x| \leq R} 2\hat{k} \xi_R dx. \end{aligned} \quad (2.12)$$

よって、 $0 \leq \hat{k}(x) \leq k(x) = e^{-(x)}$  in  $B_R \setminus \bar{B}_{R_1}$  に注意し、(2.9) と (2.10) と (2.11) を使えば、以下の事を得る。

$$\begin{aligned} - \int_{|x|=R} \partial_\nu \psi_{n,R} dS \\ \leq - \int_{|x|=R} \partial_\nu \hat{k} dS \leq \int_{R/2 \leq |x| \leq R} \hat{k} \Delta \xi_R dx \\ \leq \frac{C}{R^2} \int_{R/2 \leq |x| \leq R} e^{-(x)} dx \leq C' R^{N-2} e^{-(R/2)} \\ \text{for } R > \max\{2R_1, 2\}. \end{aligned}$$

ただし、 $C$  と  $C'$  は正の定数である。よって (iv) を得る。

最後に、(ii) と (iii) を証明する。(2.6) の方程式の両辺に  $\Delta \psi_{n,R}$  を掛け、 $B_R \times (t, \tau)$  ( $t < \tau$ ) で積分し、部分積分すると

$$\begin{aligned} \frac{1}{2} \int_{B_R} |\nabla \psi_{n,R}|^2(t) dx + \int_t^\tau \int_{B_R} \phi_n (\Delta \psi_{n,R})^2 dx dt \\ + K_3 \int_t^\tau \int_{B_R} |\nabla \psi_{n,R}|^2 dx dt \\ = \frac{1}{2} \int_{B_R} |\nabla \psi_{n,R}|^2(\tau) dx \leq C \int_{\mathbf{R}^N} (|\nabla \chi|^2 + |\chi|^2) dx \end{aligned}$$

が得られ、これから (ii) と (iii) が導かれる。□

命題 1.3 の証明 (続き). (2.2) のテスト関数として、 $\varphi(x, t) = \psi_{n,R}(x, t)$  を考える。この時、各  $\tau \in (0, T)$  に対して、

$$\begin{aligned} \int_{B_R} (v(x, \tau) - u(x, \tau)) \chi e^{-(x)} dx \\ \leq \iint_{Q_\tau} (v - u)(\phi - \phi_n) \Delta \psi_{n,R} dx dt \\ + \int_{B_R} (v(x, 0) - u(x, 0)) \psi_{n,R}(x, 0) dx \\ + \iint_{Q_\tau} (2K_1 + g)(v - u) \psi_{n,R} dx dt \\ - \int_0^\tau \int_{\partial B_R} (v^m - u^m) \partial_\nu \psi_{n,R} dS dt, \\ \leq 2M \iint_{Q_\tau} |(\phi - \phi_n) \Delta \psi_{n,R}| dx dt \\ + \int_{B_R} [v(x, 0) - u(x, 0)]_+ \psi_{n,R}(x, 0) dx \\ + 3K_1 \iint_{Q_\tau} [v - u]_+ \psi_{n,R} dx dt \\ - 2M^m \int_0^\tau \int_{\partial B_R} \partial_\nu \psi_{n,R} dS dt \end{aligned} \quad (2.13)$$

が成り立つ。ただし、 $[u]_+ = \max\{u, 0\}$ 。なお、この計算においては、 $\partial_\nu \psi_{n,R} \leq 0$  on  $\partial B_R \times (0, \tau)$  という事実および不等式 (2.1) と (2.3) を使っている。

ここで、補題 2.1 (ii) と (2.5) から、次の事実に注意する。

$$\begin{aligned} \|(\phi - \phi_n) \Delta \psi_{n,R}\|_{L^1(Q_\tau)} \\ \leq \|(\phi - \phi_n) / \sqrt{\phi_n}\|_{L^2(Q_\tau)} \|\sqrt{\phi_n} \Delta \psi_{n,R}\|_{L^2(Q_\tau)} \\ \rightarrow 0 \text{ as } n \rightarrow \infty. \end{aligned}$$

故に、(2.13) で  $n \rightarrow \infty$  とすれば、補題 2.1 (iv) を用いることにより、

$$\begin{aligned} \int_{B_R} (v(x, \tau) - u(x, \tau)) \chi e^{-(x)} dx \\ \leq \int_{B_R} [v(x, 0) - u(x, 0)]_+ e^{-(x)} dx \\ + 3K_1 \iint_{Q_\tau} [v - u]_+ e^{-(x)} dx dt \\ + 2CM^m \tau R^{N-2} e^{-(R/2)} \end{aligned} \quad (2.14)$$

を得る。(2.14) で  $R \rightarrow \infty$  とすれば、 $0 \leq \chi \leq 1$  を満たす任意の  $\chi \in C_0^\infty(\mathbf{R}^N)$  に対して、

$$\begin{aligned} \int_{\mathbf{R}^N} (v(x, \tau) - u(x, \tau)) \chi e^{-(x)} dx \\ \leq \int_{\mathbf{R}^N} [v(x, 0) - u(x, 0)]_+ e^{-(x)} dx \\ + 3K_1 \int_0^\tau \int_{\mathbf{R}^N} [v - u]_+ e^{-(x)} dx dt. \end{aligned}$$

従って,

$$\begin{aligned} & \int_{\mathbf{R}^N} [v(x, \tau) - u(x, \tau)]_+ e^{-\langle x \rangle} dx \\ & \leq \int_{\mathbf{R}^N} [v(x, 0) - u(x, 0)]_+ e^{-\langle x \rangle} dx \\ & \quad + 3K_1 \int_0^\tau \int_{\mathbf{R}^N} [v - u]_+ e^{-\langle x \rangle} dx dt \\ & \quad \text{for } \tau \in (0, T). \end{aligned}$$

ここで、グロンウォールの補題を用いれば、(1.5) を得ることができる。□

### 参考文献

- 1) D. G. Aronson, M. G. Crandall and L. A. Peletier, Stabilization of solutions of a degenerate nonlinear diffusion problem, *Nonlinear Anal.* 6 (1982), 1001-1022.
- 2) M. Bertsch, R. Kersner and L. A. Peletier, Positivity versus localization in degenerate diffusion equations, *Nonlinear Anal.* 9 (1985), 987-1008.